

杉並ぐる

つなぐ ひろがる
ささえる

2022年12月発行 vol. 26



このマークは、「顔は知っているけれど…」というご近所さん同士が、お互いに助けあえるような第一歩を踏み出してほしい、という思いから生まれました。困ったときに「ちょっと手伝って」「手伝いましょうか」とお声が掛けあえる関係に繋がれば、嬉しく思います。ぜひご活用ください。

杉並区 生活支援体制整備 マーク

検索



高井戸地域には「『ふじみがおか』地域を考える会」(2021年に名称変更)という地域づくりについて話し合う集いがあります。集いのメンバーのうち、多世代交流の場を作りたいという有志が「上高井戸端」というプロジェクトチーム(任意団体)を立ち上げ、コロナ禍の中、試行錯誤しながら交流活動に取り組んでいます。上高井戸町会会館で開く毎月の定例会はいつも賑やかです。

民間の活動団体も参加した「考える会」

上高井戸端が誕生するに至った、そのプラットフォームともいえる「ふじみがおか」地域を考える会(以下「考える会」)は2019年2月に発足しました。地域課題について幅広く話し合う会で、当初メンバーは民生委員、小中学校の校長、町会役員らを含め70人ほどの大きな集合体でした。

ケア24高井戸の尾関久子さんは、「ケア24(地域包括支援センター)は担当地域が決められています。地域づくりは必ずしもそうなりません。ですから、地域に住んでいる人や団体だけでなく、関心ある誰もが参加できるように、担当地域にこだわらずに、考える会を設置しました」と話します。考える会の名前が「高井戸」ではなく、あえて「ふじみがおか」となったのは、そんな経緯がありました。

考える会には町会、民生委員、あんしん協力員らだけでなく、民間の介護系サービス事業者の連絡会、きずなサロン、日常的な生活支援を行う「ちょこっと支え合い」(本号第3号参照)、



上高井戸端の定例会

チームオレンジ(認知症サポーターのグループ)など地域で活動している団体・グループも参加しています。

コロナ禍中、有志で立ち上がった「上高井戸端」

世代、業種などを越えた考える会の意見交換では、「以前より地域のつながりが薄くなった」「地域の情報が集まり、だれもが話しやすい場があれば」などの声が出ました。共有された課題は「地域コミュニティの再生」です。そのためのキー

今号の主な内容

- 多世代交流の居場所づくりをめざすー「上高井戸端」……………1～3面
- 「たすけあいネットワーク・生活支援体制整備合同イベント」開催……………3～4面

ワードは「多世代交流」と「居場所づくり」でした。

参考になったのが「子ども食堂」です。杉並区内の「子ども食堂マップ」を見て気が付いたのは、なぜ上高井戸地域には子ども食堂がないの？という疑問でした。この疑問について皆で話し合う中で見えてきたのは、世田谷区との区境に位置しており区画が入り組んでいること、環八通りや甲州街道によって分断されていること、公的な施設や商店街が少ないことなどの上高井戸の地域性でした。

上高井戸端の平田敬子代表(富士見丘小学校学校支援本部長)がこの問題に取り組んでみたいという有志が自主的に集まって話し合いを始めました。「食が介在すると集いやすいし、居場所になるきっかけになる」「上高井戸町会会館(以下「町会会館」という場所があるので、放課後などに子どもたちが宿題を持って来て、そこで大人も一緒におやつを食べる…そんな場になればいい」などなど。その思いが束になって2020年6月に上高井戸端(任意団体)を発足させました。上高井戸端は「上高井戸」と「井戸端」を合わせた名前。「上高井戸地域の井戸端のような集いの場」という意味が込められています。



上高井戸端の紹介リーフレット

地元農家の協力で「じゃがいもパーティー」

上高井戸端を立ち上げたものの、コロナ禍で、思い描いていた活動はできません。そんな中、会の発足を知った地元農家から、じゃがいも10キロの提供があり、2020年8月、感染対策に十分に配慮しながら「じゃがいもパーティー」を町会

会館で開催しました。スタッフを含め約30人が参加。近くの介護事業所に通われているご利用者や近所の子どもたちも加わって、茹でたジャガイモに塩、コショウ、バターで味付けしたり、キュウリ、タマネギ、コーン、ハムをトッピングしたり、自由に食べながら交流を楽しんでもらいました。



農家からいただいたじゃがいも

「むかし探し」のまち歩き

コロナ禍が続く中でも毎月の定例会は欠かさず開催し、時にはゲストを招くなどして情報交換と話し合いを重ねていた上高井戸端。この間に、会のリーフレット作成やボランティア団体として区の関連サイトに登録するなど、少しずつ団体としての体制を整えて準備しました。

そして、まだまだイベント開催には制約がある中で提案されたのが「まち歩き」でした。高井戸地域区民センター協議会が毎年開催しているまち歩きに参加したメンバーが、「まち歩きって面白い」と勧めたのです。「考えてみれば、この地域はお寺など古い建物や水車小屋跡などがある」(平田さん)と気付いたそうです。

イベント名は「上高井戸むかし探し・昔語り」。まち歩きと、映画(杉並区政40周年記念映画「昭和47年制作」)を見ながらの昔語りの2プログラム同時開催です。好天に恵まれた10月29日(土)の午前中、まち歩きにはスタッフを含め11人が、昔語りには15人が参加して行われました。昔語りの進行は上

高井戸町会の厚生部が担い、イベント開始前には上高井戸町会長から参加者への挨拶もあり



まち歩き

ました。

まち歩きグループは町会会館を出発し、稲荷神社～水車小屋跡～第六天神社～庚申塚～医王寺～長泉寺～町会会館と回ります。途中、見つけた農産物直売所(コインロッカー式)には参加者たちが興味を持ち、大根、ブロッコリー、カブなどの野菜をチェックしていました。参加した男性は「上高井戸に住んでいるが、毎日2時間ほど歩いている。同じ道でも歩いていれば何かしら発見があるから面白い」と話していました。

町会会館とオンラインでつなぐ

今回、上高井戸端は新しい試みをしました。それは、まち歩きと町会会館で行う映写鑑賞会の集いをオンラインでつなぐ“ハイブリッド開催”にしたことです。途中の寺社3か所で平田さんがタブレット型端末で現地の映像を町会会館へ送ると、昔語りの参加者がスクリーン映像を見ながら解説をしたり、昔話をしたり。町会会

館の参加者は外の様子が分かるし、歩いている人も寺社の由来などを知ることができるという斬新なやり方



町会会館で中継を見る

でした。町会会館側のPCを操作したのは、上高井戸にある地域密着型サービスである介護事業所の所長です。

上高井戸端の活動は緒に就いたばかりで、目指している多世代交流の活動は思うように進んでいません。ケア24の尾関さんは「地域活動は成功ばかりではなく、失敗を重ねながらも広がっていくもの。上高井戸端は設立と同時にコロナ禍に突入し、いろいろ試行錯誤しながら現在に至っている。コロナ禍だからこそ、自分たちの立ち位置、団体の目的をじっくり考える機会が持てた」と話しています。

【お問い合わせ】 上高井戸端 kamitakaidobata_ren@googlegroups.com



「たすけあいネットワーク・生活支援体制整備合同イベント」開催

高齢者の地域での孤立・孤独をなくすためにどうすればよいかを関係者が一緒に考えようと、令和4年度の「たすけあいネットワーク・生活支援体制整備合同イベント」が10月26日、勤労福祉会館ホールで開催されました。「ご近助でほっこり～見守り・つながり・ささえあい～」をテーマに講演と活動発表、パネルディスカッションが行われ、日頃から、地域の見守りに取り組む「あんしん協力員」(ボランティア)や「あんしん協力機関」(企業など賛同団体)などが一堂に会し、地域でのゆるやかなつながりや支えあいの大切さを確認し合いました。このイベントは令和2年度・3年度はオンラインで開催してきましたが、今回初めて対面での開催となりました。

見守り体制に完成形はない

はじめに、武蔵野大学人間科学部社会福祉学科教授の渡辺裕一さんが「見守り・つながり・ささえあいで孤立・孤独ゼロのまちづくり」と題して講

演を行いました。渡辺さんは「見守り」は水道や電気と同じインフラストラクチャーであるとし、訪問すると「来るな」と拒絶するような人も含めて、すべての人が生きていくため



渡辺裕一さん

に必要なものだと説きました。他人に迷惑をかけるような人は地域のつながりから排除されてしまいがちですが、迷惑行動は当人がSOSを発していると捉えてみるとよいと指摘。地域には、生まれ・育ち・性格・学歴・職歴・趣味・特技などが違う多様な人々が暮らしていて、その多様な「自分らしさ」を認め合うことが地域の力になる、と話しました。「見守り」のポイントを、①「行く」(訪問する)と「来る」(集まりに来てもらう)の“ダブルアタック”でやる②人にはそれぞれの「見守られ方」がある。見守りを拒否する人には、その気持ちを受け入れつつ、見守りのネットワークを作る③変化により敏感に気づくよう心がける④気づいたら、それを伝える⑤連絡を受けたら行動する—の5つにまとめ、見守り体制に完成形はなく、社会の変化とともに見守りも変わっていく、と締めくくりました。

西荻窪の商店街も見守りに協力

ケア24善福寺・あんしん協力員と「上井草 結いの会」の2組が、見守りや地域づくりの取り組みの活動発表をしました。令和3年、ケア24善福寺・あんしん協力員は、地域でのゆるやかな見守りを実現するために、高齢者の利用しそうな店舗などを記した「ご近所たすけあいMAP」づくりに取り組み始めました。協力員、民生委員とともにリストアップした店舗を回り、MAP掲載のお願いと、来店する高齢者への見守りの協力を求めました。令和4年7月、最終的な掲載数は88か所に上り、完成した地図の配布に西荻窪にある東京女子大学



ケア24善福寺あんしん協力員の皆さん



上井草結いの会



進行役を務める渡辺さんと佐治翔子さん

の学生も参加したそうです。協力員二人からは、配付時、店先での幾つものエピソードも交えて発表されました。

「上井草 結いの会」は、地域で活動する自治会、学校支援本部などの公的な組織だけでなく、スポーツセンターなども交えて連携し、さまざまな地域の活動が行えるネットワークづくりに取り組んでいます。詳しくは本誌22号で紹介しています。

顔の見える関係から「見守りの種」の醸成を

パネルディスカッションでは、渡辺さんを司会役に、ケア24善福寺の木村未歩子さん、「上井草 結いの会」の塙耕平さん、第1層生活支援コーディネーターで地域福祉推進担当を務める佐治翔子さん(杉並区社会福祉協議会)が語り合いました。木村さんは、地元をよく知らない大学生と一緒に“見守り協力店舗”を訪問したからこそ、店の人が地域の良さを伝えようと熱心に話してくれたと語りました。また、地域にある大学とつながりの糸口が見つけられずにいたところ、佐治さんに地域活動に関心のある大学を紹介してもらったといいます。それに対して、渡辺さんは、学生も学ぶ機会を得て、地域活動を始める人が出てくるかもしれません、と補足しました。

塙さんは、今後コロナ禍が収束したら、対面で会う機会を増やし、「上井草 結いの会」が間を取り持たなくても、地域の団体や組織が自然に互いに助けあう関係を醸成したいと抱負を語りました。最後に渡辺さんが、今回のイベントを通して、住民自らが互いにつながり、地域の組織や企業とネットワークを作っていくことができるという希望が得られた、とまとめました。

